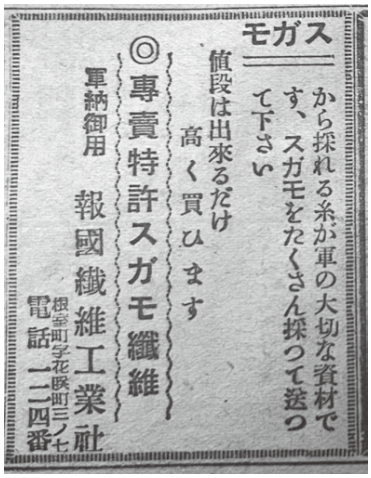
戦後80年ミニ展示「戦争のあった時代」

戦時中の海草スガモの利用

加藤ゆき恵*

スガモの買い取り？

古い植物標本が挟まれていた戦時中の新聞（1944［昭和19］年７月19日北海道新聞　釧路面）に、「スガモを高く買います」という広告が載っていました。



スガモ *Phyllospadix iwatensis* Makinoはアマモ科の多年草で、海中の岩礁に生育する種子植物です。コンブやマリモなどの藻類とは違い、花が咲き、タネをつけます。関東以北の岩礁の海に生育する日本固有種で、北海道にも分布します。海草スガモの繊維を利用？買い取りするほど？と不思議に思ったので、調べてみました。

スガモ繊維の利用

スガモの繊維利用について文献検索してみると、太平洋戦争前から戦時中にかけて、木綿に代わる繊維として利用するためのさまざまな研究が実施されていたことが解りました。国立国会図書館デジタルコレクションで確認できた最も古いものでは、1918（大正７）年に「世界的大發明海草「スガモ」と其繊維採取術－棉花に優る棉花代用品－～技術簡単、副業最適～」という文章がありました（澁谷 1918）。そこには以下のように書かれています。

然るに、今回吾々の発見した、此の「スガモ」という海草は、その生産量、実質、供給方法等に於いて実に従来の多くの繊維陸草などは到底比較にならぬ程のもので、これこそ棉花自給の重要期に於ける最も優秀なる代用品であると信ずるものである。

戦時中のスガモ繊維利用の研究

1920年代以降、スガモの繊維利用に関する研究が進められていました。1940（昭和15）年には国策としての繊維代用品についての報告が見られます。

・国内情勢「スフ原料にスガモ繊維」絹業時報・1940年

スガモは新しい繊維代用品であり、製紙用パルプや紡糸や漁網などに変じて国策線上に立派な役割を演じている。（中略）繊維飢饉がガラスや海草によって補われるとすると日本の利益は大きく海草で出来た素晴らしい衣服や紙が誕生してスフの嘆を解消させる日を期待出来よう。

海藻・海草の利用について書かれた「高度国防と海底資源－海藻工業の現況」（高橋 1940）でも、スガモが最も強靱で優良な原料であることを主張しています。

他にも、代用繊維としてのスガモ繊維製造工場を八戸、青森、根室、釧路、厚岸に設置したという会社の記録もありました（松本産業 1960）。

新聞広告を出した「報國繊維工業社」については分かりませんでしたが、戦時中の代用品としてスガモが研究され、実際に利用されていたことが確認できました。

この内容について、戦後80年ミニ展示「戦争のあった時代」植物編として、2025年７月12日から８月31日まで展示を行いました。

［文献］

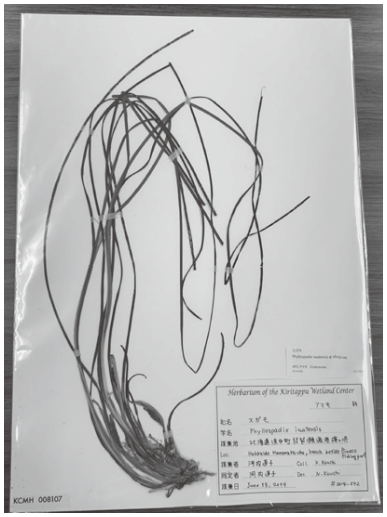
絹業時報．1940．国内情勢「スフ原料にスガモ繊維」，絹業時報 2(2)，48-49.

松本産業．1960．松本産業七十五年史．松本産業，東京．

大場達之・宮田昌彦．2020．日本海草図譜［改訂版］．北海道大学出版会，札幌．

澁谷鶴松．1918．世界的大發明海草「スガモ」と其繊維採取術－棉花に優る棉花代用品－－技術簡単、副業最適－．農業世界，13(5)：40-48.

高橋武雄．1940．高度国防と海底資源－海藻工業の現況．科学ペン5(12)，148-159.



スガモ標本（当館蔵）

＊釧路市立博物館

戦後80年ミニ展示「戦争のあった時代」

歴史編の開催

戸田　恭司*

戦後80年の節目に当たり、釧路市では当時の戦争に関わる取り組みが行なわれている。その一環として、当館では収蔵資料の展示を通して当時の暮らしを紹介するミニ展示「戦争のあった時代」を開催し、その歴史編を担当した。会期は７月12日～９月28日、会場は常設展示室２階の一角、「戦時生活と釧路空襲」のコーナー近くである。

ミニ展示という名前のとおり、ガラスケース１つを使った展示である。金属供出に関わる写真２点のほか、尋常小学修身書、奉公袋、慰問袋、千人針、ゲートル、飯ごう、飯ごうを収める保温袋、日の丸寄せ書き、防空頭巾、鉄かぶとを展示した。出征に関わる資料を中心に据えて、必要に応じて各資料に説明を加えた。また、暮らしの移り変わりを紹介するという展示意図もあったため、期間中に資料の入れ替えを行った。空襲時に戦闘機から発射されたと思われる銃弾や、銃弾が貫通した跡が残るトタン板、防空壕前での記念写真、戦後になって校舎前で撮影された児童の集合写真、空襲を伝える記念碑の写真などを展示した。市民からお借りしたこの銃弾は、戦後、畑の中から見つけ出されたとのことで、戦争を知る貴重なものとして保管されてこられたものである。

さて、このミニ展示は、市教委の学校教育サイドから市内の各小学校に対して開催の情報とあわせて、授業での活用も勧められたとのことで、結果としては数校からではあるが、展示の見学並びに解説の依頼を受けて対応した。これまでも戦時の暮らしに関わる同様の依頼はいただいており、その都度対応してきている。戦争について、空襲による釧路のまちの被害などについて、展示資料を前にして話している。

今年はこれまでの話してきた内容を見直し、戦後80年を意識して戦争そのものについて見学に来た子供たちとやり取りしながら話す時間を増やした。「戦争とはどんなことをすること？」「戦争をするために必要なものは何？」「空襲っていう言葉を聞いたことはある？」などと問いかけながら、国民が戦争するための体制に組み込まれていった当時の暮らしのようすを話した。気がつけばおおむね30分前後。時間がたつにつれて、同じ場所で話を聞き続ける児童の興味が薄らいでいく。自分たちの学校近くで竹槍訓練が行われたことや落下した爆弾で何人もの市民が亡くなったことを話すと、彼らは身近に感じたようで、真剣なまなざしに変わっていった。

後日、当館職員を通じて聞いた話として、ある児童が見学後、自宅で戦争のことを調べ始めたということを耳にした。初めてのことだったので、とてもうれしく思っている。他の家庭でも「博物館で釧路の戦争の話を聞いたよ」と話題になってくれていたら幸いである。

この展示のほかに、関係資料の収集も行っており、戦時以外のものを含む自分が初見の資料のほか、他都市の関係資料（該当する博物館に尋ねたところ、初見であることから収集する方向で動かれている）もあり、市民の間にも戦後80年が意識されているようすがわかり、この機会を利用したいと考えている。

また、講演会を２つ開催した。一つは空襲を受けた際のまちのようすや、戦後に発見された不発弾の処理に関わった経験を伺う内容で、講師の方が淡々と語る口調の中に当時のようすが生々しく感じられた。

もう一つは、専門家として今に残る戦争遺跡を調査されている方のお話で、当時造られた消えゆく施設の保存について、その必要性を強く話されて、同感の思いを抱いた。

そして、釧路のまちを知ることができるものをまちなか散策して見つけるという、毎年開催している歴史探訪会では、当時の戦争に関わる場所を訪れる内容で開催し、参加者の皆さんには２時間あまり80年前の釧路へタイムスリップしていただいた。

このように、ミニ展示の開催を中心として、児童への展示解説、関係資料の収集、当時を語る講演会、そしてまちなかでの散策と、戦後80年に関わる事業を開催した。このような活動をこの１年で終わらせず、今後も継続していくことはまちの歴史を語り継いでいく上で求められる要素の一つであり、あらためてその道筋をきちんとつけていきたい。

＊釧路市立博物館